ドッペルゲンガー

瀟洒な住宅とクロージングストアと雑貨店が交互に並ぶ代官山の裏通りを、ジーンズにオレンジ色のカーディガン、ローファーの女がハンドバッグを振りながら猛然と遁走するのを、スーツに革靴の男Aが追い、それをまたジーンズにジャケットの男Bが追うという格好になった。

旧山手通りに出ると、車道側の信号が青に変わるギリギリのタイミングで女は通りの向こう側に逃れ、運良くやって来たタクシーに乗り込んで、あっという間に走り去ってしまった。

横断歩道のきわに立ちつくし、途切れぬ夕方の車列を呪っているに違いない男Aのもと

に、男Bは息を切らして駆け寄ると、「あなたもですか？」と声を絞り出した。
一瞬痙攣したように体を震わせ、Bを振り向いたAは、文字通り頭のてっぺんからつま先までスキャンするようにBを見まわすと、「どなたですか？」と聞いた。
「小田切夏子に騙されたくちですよ、ぼくも」とBが答えた。
「小田切夏子？」とAは怪訝な顔をした。
「どうせ偽名でしょうけど。あの女ですよ、あなたの追いかけてた。ぼくも追いかけてたんですけど」
「あなたも追いかけてた？」
「月曜日の今頃、また、代官山のあのあたりに来るんじゃないかって、待ち伏せしてたんですよ。案の定、あの女が現れたと思ったら、あなたが飛び出てきて、あの女を追いかけ始めた。それで、ぼくもあなたたちのあとを追ったんですよ。それにしても同じ場所で同じ芝居をしようなんて、度胸があるというか、愚かにもほどがあるかというか」
レジメンタルタイを両手でゆるめながら、Aは納得したかのように何度かうなずいた。Aの年齢は自分と同じ三十代半ばかとBは思った。額の生え際が後退し、頭頂部では毛髪の密度はかなりまばらになっていた。何かを常に訴えかけているような涙目で、口もまた

常に尖っている。全力疾走したせいか、顔が上気して赤い。それは、Bもまた同様だった。
「あなたにはなんていう名前だって言ってたんですか？」とBがAに聞いた。
「山崎春香」
「あなたは春で、ぼくは夏か。適当な女だ」と吐き捨てるように言うと、Bは「どこかで情報交換しませんか。ビールでも飲みながら。あの女、絶対許せないですから」とAに提案した。
Aは「そうですね」とうなずいた。
Bはぐるりと首を回してあたりを探ると、「あそこはどうですか？」と通りの反対側、ヒルサイドテラス側にある大きめのカフェを右手で指さした。
Aはうなずくと、ちょうど青になった横断歩道を渡り始めた。BもまたAのあとを追うように、道を渡り、そして左に曲がってカフェを目指した。

カフェのドアを押し開けると女性スタッフが「いらっしゃいませ」と笑顔で近づいてきた。Bが「内密の話をしたいんで、一番奥に座らせて」と言うと、女性は表情を少しも変えずに「どうぞこちらへ」と、まさしく店の一番奥、隅のほう、きっと誰も座りたくない

だろう辺境のテーブルへと二人の男を案内した。すぐ横にはトイレへの出入り口があった。
メニューにベルギービールを見つけたBはシメイをオーダーし、Aはコーヒーをオーダーした。
「お酒は飲まないんですか？」とBが聞くと、「いや、今飲むと、まわりそうで」とAが涙目で答え、グラスの水をゴクゴクと飲みほした。
Aの心臓が落ち着いたのを見計らい、Bがこう切りだした。
「ぼくは二五〇万円、やられました。あなたは、いくらやられたんですか？」
「あ、ええ」とAは最初口ごもったが、Bの率直な態度で信用したのか、「三〇〇万円ばかりですね。あとは食事代とか、ホテル代とかで、十数万円くらいですか」と答えた。
「結局、ぼくと同じぐらいですか。ま、お互い、早めに詐欺だと気づいてよかったですよ。ヘタしたら、一〇〇〇万ぐらいやられてたかもしれないですもん」
Aは何度もうなずいた。
「それにしても、くやしいですよね」
「はい、まったく。お金より何より、気持ちを弄ばれたことのほうが悔しくて悔しくて」とAはまた水を飲もうとし、空になったのを思い出してあわててグラスをテーブルの上に

置いた。
「代官山のあそこであなたも待ち伏せしてたってことは、コンタクトレンズですか、きっかけは？」
「は。そうですね。まんまと騙された」
「あとから思えば、おそらく、使い捨てのコンタクトレンズを何枚もばらまいてたんじゃないですかね。ぼくらがすぐに見つけられるように。ぼくも探したら、すぐに見つけられたし。言いかえれば、ぼくらが見つけてくれないと、あの女のシナリオに狂いが出ますしね」
「ああ、なるほど。そうかもしれませんねえ」とAは大きく何度もうなずいた。「まあ、でも、若い女性がですよ、道のまん中で、ああして、はいつくばって、何かを探し回っていれば、ふつう、手伝うじゃないですか、下心無くても。わたしも親切心から、落とし物ですかって聞いたら、コンタクト落としちゃってと言うので、探してあげたわけですよ。そしたら、うーん、確かにおっしゃるとおりですね、数秒で見つけられましたね、うーん」とAは腕組みをした。
スタッフが大きめのグラスに注がれた赤みを帯びたシメイとコーヒーを二人のテーブル

の上に順に置いた。
Bはグラスを持つと「では」といって乾杯の仕草をした。Aはコーヒーカップを掲げるようにして、ちょこんと頭を下げた。
ビールをゴクリと一口飲むとBはグラスをテーブルに戻し、フーッとため息をついた。
「それで彼女は名刺をくださいと言った。あなたは渡した。すると数日後、会社に電話がかかってきた。実はあのとき、大事なプレゼンに遅刻寸前だったので、コンタクトレンズを見つけていただき、たいへん助かった。ついてはお礼をしたいと。そんな感じでしたか？」
「そうそう、まさしく、それですよ、それ。あなたと、まったく同じです、わたしの場合も。あなたも会社勤めですか？」とAが聞いた。
「小さな広告制作会社に勤めています。ま、いい女ふうでしたから、ぼくもスケベ心出して、あの女と食事をしてしまったのが運の尽きで」
「最初の食事のときは、わたしが払うと言ってもきかずに、お礼ですからと、女が全部支払いましたよ」
「ぼくのときもそうですよ。それなりに高そうなイタリアンのレストランでしたが、青山の」

「わたしは広尾のフレンチでした。その日はそれで別れましたが、まあ、独身で彼女もいなかったんで、のぼせ上がったんでしょうね、番号を教えてくれと言われたんで教えた携帯に電話がきたんですよ、その1週間後に。それで映画を観に行ったんですよ」
「なんの映画でしたか？」
「あれですよ、あれ、『そして父になる』。あの女、映画を見ながらボロボロ涙をこぼして。終わりのほうでは、わたしの手を握るんですよ。クソー」とAは目をギューッとつむった。
「ぼくも同じ映画でしたよ。ということは、あなたへの攻略と、ぼくへの攻略と、ほぼ時期が重なっていたってことですかね。ぼくがコンタクトレンズを探してあげたのは9月の末ですが」
「ああ、わたしもです」とAはいまいましそうに眉根を寄せた。「あいつは、何人もの男を同時並行でたぶらかしていたってわけですか」
「そういうことですね。我々以外にもいる可能性は大ってことです、あの時期」
「ぶしつけと言いますか、単刀直入に聞きますが、あのう、ホテルに誘われたのは何回目のデートのときでしたか？」
「確か、5回目ですかね」

「おお、それもわたしと同じです。５回目に会ったときに、今夜は帰りたくないとか言うんですよ。それで、つい……」と、Ａはガクリと頭を垂れた。
「まあ、いいカラダ、してましたがねえ」とＢも腕組みをして目をつむった。
「確かに」とＡはコーヒーカップを弄びながらつぶやくように言った。
「可憐なというか、こう、まっすぐなかわいらしさがある女だったじゃないですか。そんな女がオレに気があるのかと。バカですね、男ってのは」
「自分でいうのもなんですが、勉強が足りませんでした」とＡはじっとコーヒーカップの中を見つめた。
ビールを飲みほしたＢは片手を上げてスタッフを呼びながら、Ａに聞いた。「ビールに変えなくていいですか？」
「は、じゃ、ちょっと、のどが渇いたので、わたしは普通の日本のビールを」
スタッフが笑顔をふりまきながらテーブルにやって来ると、Ｂは「プレモルを二つ」とオーダーした。
トイレ側の壁を背にして座っているＢからは、Ａの姿ごしに暗くなった旧山手通りが見

える。月曜日だから行き交う人は少ないが、カフェの中は満員だった。高い天井に反響した何百もの声がさざ波のように耳に届く。

Aは何を思い出しているのだろうか、さっきからじっとコーヒーカップの中をのぞきこんでいる。思いにふけると周囲を忘れてしまうたちなのだろうか。

Bの視線に気づいたのか、はっと驚いたような表情を浮かべてAは顔を上げた。

「なに、考えていたんですか？」

「いや、その、まあ、なんていいますか、短い期間ですが、いい夢は見たなと。実際、いい女でしたから、よくよく考えてみれば、あれほどの容姿の女と、一度とはいえ、まあ、夜をともにした。そこだけ切り取ってね、こう、額縁に入れて飾れば、人生の勝利の瞬間とも見えるわけでして」

「言い得て妙、ってやつですね」

「ただね、それだけに、だまされたという屈辱はなくならないですよ。金も返して欲しいですが、それ以上に土下座させたいですよ」

「土下座のあとは？」

「土下座のあと？」

「土下座だけでいいんですか？」
Aが何かを言いかけたその時、近づいてきたスタッフがビールの入った背の高いグラスをトントンと二つテーブルに置いた。Bは礼を言う代わりに、女性スタッフに向かって笑みを浮かべた。
「何か言いかけていたようですが」と聞きながらBはAに向かってまた乾杯するようにグラスをかかげた。
Aはまた頭をちょこんと下げると、同じようにグラスをかかげ、それからゴクリと一口飲み込んだ。
Bが言った。「土下座だけでいいんですか、と聞いたんでしたっけ」
Aはグラスを置き、右手の指で唇についた泡をぬぐうとこう答えた。
「男として本心を言うなら、土下座だけでは不足ですよ。まったく不足です」
「どうしたいですか？」
Aはグラスの中のビールをじっと見つめながら答えた。
「犯します。気がすむまで、犯します。そして道のまん中にほうり出します」
そう言ってAはビールをゴクゴクと一気に半分ほどあけた。

「そりゃそうですよね」とBは言いながらグラスに口をつけた。「それほど悔しいってことです。それほど傷つけられたってことです」

Aは大きくうなずくと、Bにこう聞いた。

「あなたも、あれですか、音楽留学のための授業料ですか、せびられた金の目的は？」

「そうですね。冬休みにニューヨークのなんとかっていう学校でボーカルレッスンを受けることになっているんだけど、父親が急病になって授業料が払えなくなったと」

「一時的に立て替えてくれないかと言われたんでしょ？」

「まさしく。それが二五〇万円」

「まったく、わたしと同じですね。今思えば、父親の急病と授業料とどう関係があるのかと思いますが、あのときは、納入期限が迫っているんで、月末にはお返ししますなんて言われて、ああ、いいよなんて……。ベッドの中で、事が終わった後に言われちゃあ、誰だって、まかしてくれって言いますよ」

「ぼくもそうです。でも、歌、うまいですよね、彼女、実際」

「ああ、確かに。歌ってくれましたよ、伴奏なしで。プロはだしっていうか。ジャズの曲だって言って。それもあって、まんまとだまされた」

「ところで、あの女を告発する気持ちはないんですか？」
「警察にですか？　あなたは？」
「ぼくですか。うーん、難しいです。裁判になれば、お金もかかるでしょうし、この一件が外に知られることにもなる。まあ、正直に言いますと、ぼくは結婚をしているので、このことがバレたら相当まずい事態になる。ですから、ぼくの場合は、個人的にあの女を制裁して、そして金を取り戻して終わりにしようかと思っているんです」
「ああ、そうだったんですか。そりゃあ、たいへんですね。わたしの場合、まあ、三〇〇万円だと、裁判だの、会社に知られることのデメリットとかと、くらべてしまうと、告発するほうが割りに合わないというのは、あなたと同じですよ。ただね、気持ちが収まらないのでね、女を見つけ出してから、女の態度次第ですかね」
　Bはグラスの飲み口を指でいじりながら、思い出したようにこう聞いた。
「そういえば、ニューヨークの音楽留学のお金の話の後、ジャズレストランに連れて行かれませんでした？」
「ああ、行きました、行きました」
「どこでした？」

「えーと、なんていいましたっけ……。確か、六本木でしたね」
「スイート・ベイジルじゃなかったですか？」
「ああ、そうです、そうです。かなりオシャレっていうか、華やかっていうか、ディナーを食べながらジャズボーカルを聞いたんですよ」
「ああ、そこも同じですね、ぼくと。ぼくのときはですね、日本人の若い女性のジャズ歌手で、なんていったかな、青井、青井、えーと、青井……」
「青井エリナじゃないですか、確か」
「ああ、そうです。青井エリナです。ショートカットのヘアスタイルで、のっぽで」
「そうそう。あの女、ああいう歌手になりたいのなんて、耳元でほざきやがった」
すると、Bは首をしきりにひねるようにして、「おかしいな」とつぶやいた。「なんか、へんだ」
「どうしたんですか？」とAが心配そうに聞いた。
「だって、歌手が同じって、へんじゃないですか？」
「へんですか？」
「へんでしょう。確か、あの晩、今夜限りの帰国ライブって言っていたような気がしたし。

それに、あそこ、よっぽど有名な外国人ミュージシャンじゃない限り、連続ライブってしなかったんじゃないかな」
「そんなもんですかね？　でも、確かに青井エリナでしたよ。真っ赤な、こう、ふわーっとしたドレスを着ていたという記憶があります」
「ぼくもです。真っ赤なドレスを着て、ときどき、背の高い椅子に腰かけて、歌っていました。……ちょっと待ってください」
　そう言ってBはジャケットの内ポケットからスマートホンを取り出し、何かを打ち込んだ。
「あの、あなたがスイート・ベイジルに行ったのは10月、つまり先月ですか？」
「あ、ああ、はい」
「これ、スイート・ベイジルのライブスケジュールです。ほら、10月は青井エリナは29日の火曜日一日しか出ていないです。そして、ほら」と、Bはスマホの画面にタッチして表示を変えた。「ね、これ、ぼくの29日のスケジュールですが、19時にスイート・ベイジルって書いてあるでしょ。ぼくもこの日にスイート・ベイジルに行って、あの女と青井エリナのライブを見ているんです」

「だって、だって、だってですよ……。ちょっと待ってください」とAはあわてて自分のスマートホンを取り出した。画面をタップして、そして、じっと画面を見つめたまましばらく黙った。「わたしも10月29日の午後7時ですね。……スイート・ベイジルって書いてあります。おかしいな……」

「ぼくは確かに、あの女と二人でテーブルにつき、ライブを見ていましたよ、あの夜」

「あのう、ステージが2回あったんじゃないでしょうかね？」

「いや、それはないです。たとえそうだとしても、ライブの後もぼくはあの女と夜中まで一緒でしたからね」

「確かに、わたしも、あの夜はホテルに泊まりました……」

Aは目をつむり、腕を組んだ。

「ということは双子なんですかね？　あの女に双子の姉妹がいれば、つじつまが合いますよね」

「可能性はあります。でも、同じ日の夜に同じ店に行きますか？　しかも、それまで、あなたとぼくに、まったく同じことをしている」

「うーん……。ちなみに、どんな服を着ていたか、憶えていますか？」

「もちろん。上下真っ白のパンツスーツに、確かグリーンのシャツを着ていたんじゃないかな。鮮やかなコーディネートだったのでよく憶えてます。あなたは？」
「お、同じです。比較的ピッタリしたズボンをはいていたので、スタイルいいなあと見とれたのを憶えています」
「じゃ、双子じゃないかどうか、もう一つ、確認させてもらっていいですか。あの女、あごのここんところにホクロがあったんです。それと、右あごのここらへんにもホクロがありました。どうでしたか？」
「ありました。うん、ありました」
Aはありありとその動揺を表情に出した。まばたきが頻繁になり、息も早く、浅くなった。Aはせき払いをしてから、こう小声で言った。
「どういうことなんですかね、これって。同じ場所に、同じ人間が二人いたってことになるじゃないですか。しかも、わたしと食事した女と、あなたと食事した女と。一人の女が二人に分裂して、別々に食事したってことですか？　でも、あの夜、もしも、同じ女が二人いたら、すぐにわかるはずですよ。そんなに広いレストランじゃないし。同じ洋服を着ていたんだから。いったい、どういうことなんですかね、あああ」

そう言って、Aは文字通り両手で頭をかかえた。
Bはグラスに残っていたビールを飲みほすと、こう言った。
「ドッペルゲンガーかもしれませんね」
「ドッペル、えっ、なんですか？」とAが顔を上げた。
「ドッペルゲンガー、です。一人の人間が同時に複数の場所に現れる現象です。日本でも昔から影の病と言われてよく知られていた現象なんですよ。Ｗｉｋｉｐｅｄｉａにも出てますよ。探してみましょうか」
そういうと、Bはまたスマートホンを操作した。
「これですよ」とBは自分のスマートホンを操作した。
Aは目を細め、唇を動かして読み始めた。
「ほんとですか、これ？」とAはスマートホンをBに戻しながら言った。
「さあ。でも、これしか考えられなくはないですか？　ただし、この女のドッペルゲンガーの場合は、世界まで二重になってしまったんですよ。つまり、ぼくとあの女がいる世界と、あなたとあの女がいる世界とに、どの時点かで分かれ、そしてどの時点かでまたくっついて元に戻った。そう考えるのが妥当ではないかと思うんですが」

「そんなことって、あるんですか？」
「あると認めるしか、ぼくとあなたが遭遇した出来事は説明できないです。きっと、あの女は、そういう特殊な能力というか、特殊な性質を持っているんじゃないでしょうか」
「なるほど」と答えるAの唇はかすかに震えていた。
「ドッペルゲンガーの現象が生じた人間は、間もなく死ぬと言います。Ｗｉｋｉｐｅｄｉａにも書いてあったでしょう。ということは、ドッペルゲンガーを起こした人物と別世界に移動した人間も危ないということになりませんかね」
「ああ、可能性は、ありますね」
Aはもはや気もそぞろで、右手の親指と人さし指であごを何度もこすっている。
Bは声を潜めて言った。
「あの女と関わると、また同じ現象に巻き込まれるかもしれない。そして、もしも二重になった世界が、元に戻らなかったとしたら、いったい、どうなるんだろう。どちらかの世界が消滅してしまうんだろうか。自分がいたほうの世界が消滅したら、自分も消滅してしまうんだろうか、なんの痕跡も残さずに……」
そう言い終えると、Bは両手をテーブルの上で組み、じっと空になったグラスを見つめ

た。

二人はしばらく無言のまま、それぞれの思いにふけった。

Bが顔を上げ、沈黙をやぶった。

「ぼくは降りました。あの女を制裁するというゲームから降りました。ドッペルゲンガーや二重世界なんて、理解不能だし、手に負えません。ぼくはすべて忘れて普通の生活に戻りますよ。うん、そうする、決めた」

Bはそう言ってAを見つめ、大きくうなずいた。

Aの顔にはそんなBからエネルギーをもらったかのように赤みが差した。

「そうですねえ」とAはつぶやいた。それから、グラスをあげてビールを飲みほすと、こう言った。

「わたしも、そうします。耐えられない、この恐怖は。三〇〇万円なんて、たいした金じゃないです。自分の人生に戻りますよ」

Bはニッコリ笑うとAに向かって右手を差し出した。不意を突かれたような表情を浮かべてから、Aもまた右手を伸ばしてBの手を握った。二人は、二度三度、握った手を上下に振った。

「さ、行きますか」とBが立ち上がった。
「あ、もう出ますか？」と名残惜しそうにAがBを見上げた。
「会社に帰って仕事がありますので」とBは言いながらテーブルの上の勘定書きをつかんだ。「きょうはぼくが。こんど、どこかで偶然お会いしたら、ごちそうしてください」
Bはすたすたとカフェのエントランスに向かった。Aがあわててそれを追いかけた。
勘定を済まして、表に出た。
「代官山の駅ですか？」とBが聞くと、「はい」とAが答えた。
「じゃあ、あっちの方向ですね」とBは右手のほうを指さした。「ぼくはタクシーで戻ります。では、ここで」とBは深々とおじぎをした。
Aもおじぎをして返すと、ヒルサイドテラスのほうに向かって歩いて行った。
Bはすぐにタクシーをつかまえず、Aとは反対の神泉方向に歩き出した。
Bはスマートホンを取り出し、電話をかけた。
「あ、もしもし……。いままでね、さっき、きみを追いかけた男と話をしていたよ。彼はもうきみを探そうとはしない。告発もしない。つまり、ぼくらは安全だということだ」
そのままスマートホンを右耳に押し当てたまま歩き出した。

「ぼくはキミの演出家であり振り付け師だからね、きみの全行動を把握している。それが功を奏した。それにしても、ぼくがいてよかったよ。しばらくは代官山に来ないことだな。次のターゲットを見つけたら連絡する。もっと大金を狙おう」

Bはスマホを耳に当てたまま左手を挙げた。タクシーがすっとやって来て停まった。

（太田 穣）